

## はじめに

薩長連合が倒幕に動き、王政復古の大号令が発せられ、西郷と勝の会談によって江戸城が無血開城されて、明治維新となる。そして、文明開化の世の中がやって来る。

幕末・明治初期の日本人は、どのような気持ちで日々を過ごしていたのだろうか。

尊王攘夷思想に心酔した人々、倒幕に燃えた人々、西洋文化に圧倒された人々、列強に追い付かねばと真剣に考えた人々、……。

彼らの思いは、今からは想像も及ばない、厳しく苦しいものだったにちがいない。しかし、それらは確実に現在のわれわれの存在につながっているものでもある。

近代天皇制のもと、富国強兵と殖産興業に邁進した結果、めざましく発展した日本は、昭和初期に軍部が政治を掌握し、太平洋戦争への道を突き進んでしまった。戦後に復興を遂げ、高度成長して、さらに言えばバブルがはじけ、東日本大震災があつて、今日の日本がある。日本人は、幕末以降、欧米にいかにも追い付き、伍して戦うかという課題にずっと追いまくられてきた。

その間、日本人の思考を支えたのは、本書でも論じる〈和〉〈漢〉〈洋〉という三つの教養だっ

---

た。それ以前は、江戸時代に〈洋〉からの影響が見られるものの、基本的に〈和〉〈漢〉であったから、幕末・明治初期に本格的に〈洋〉が加わって、それが今日まで続いていることの意味は大きい。

身近な例を考えても、現代医学では、東洋医学もある程度尊重されてはいるものの、西洋医学が圧倒的な存在感を持つていよう。音楽も、そうだ。邦楽は今日まで命脈を保ってはいるものの、現代音楽は主に洋楽に影響を受けて形作られている。これは明治時代に軍隊に関連して西洋からマーチが移入されたことに起因する。

本書において、〈洋〉の付加によって〈和〉〈漢〉も含めて大きな変容を迫られる日本の教養を具体的に把握し、これからの日本人の教養のありかたを模索していただければ、ありがたい。

鈴木健一

目次

はじめに……………鈴木健一 (1)

序論 変容する教養——近代における〈和〉〈漢〉〈洋〉……………鈴木健一 1

和が形成する基盤

尊王攘夷論と大和魂——本居宣長から吉田松陰へ……………田中康二 27

実録から講談・歴史的阅读へ——「中山大納言物」を例に……………菊池庸介 51

紀行「易心後語」に見る幸田露伴の教養の根柢——古人に向きあうということ……………出口智之 72

手習塾から小学校へ……………橋本昭彦 93

漢はどこへ行くのか？

書における近代的教養——清朝書学との交差をめぐる………鍋島稲子 125

「文粹もの」における朱子学と陽明学の折衷………山本嘉孝 154

ポッケと修養——明治期『菜根譚』出版の後景………磯部 敦 176

徳富蘇峰の思想と文体——『国民之友』創刊前後………木村 洋 198

洋がもたらすもの

日本語と西洋との邂逅………山東 功 221

新たな「智」の形成——福澤諭吉と慶應義塾………西澤直子 240

岩倉使節団における文化比較と翻訳——モンテスキュー著・何礼之訳『方法精理』………多田蔵人 269

討論の条件——論争誌としての『明六雑誌』………菅原 光 289

目次

内国勸業博覧会と和・漢・洋——本草学と博覧会……………	國 雄行	309
円朝と「西洋」——翻案作概観と「英国孝子伝」「黄蔷薇」「蝦夷土産」の方法について……………	今岡謙太郎	329
後記……………	鈴木健一	351
執筆者一覧……………		352